



神戸アジアタウンと長田のまちづくり

森栗, 茂一

(Citation)

兵庫地理, 41:29-37

(Issue Date)

1996-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002405>



神戸アジアタウンと長田のまちづくり

森 栗 茂 一

1. なぜアジアタウンなのか

阪神大震災で、大火災の犠牲を出した長田区には、大正時代の植民地政策によって、多くの在日韓国朝鮮人が移動・定住し、戦後のケミカルシューズ産業は在日韓国朝鮮人を中心とした人々の努力によって発展してきた。約9000人の在日韓国朝鮮人のほかに、約500人の中国人、多くの奄美・沖縄、四国・九州の故郷の村を離れた人々が、一つ同じ屋根の長屋、一つの路地に共同井戸で暮らしてきた。

近年では、約500人の定住ベトナム人をはじめ、フィリピンなどアジアの母国を離れた人々、ラテンアメリカの日系人など、28カ国の外国籍住民がこの街で働いている。長田区の震災前の人口13万人のうち約一万人強が外国籍住民であった。今回の震災では、比較的来日時間の短い、ニューカマーとよばれる外国籍住民の職場や生活の場での被害が大きく、言葉の壁によって行政やボランティア情報がいきわたらなかった。緊急放送であるFMユーメンやFMヨボセヨ（後に地域FM「FMわいわい」として認可される）や、定住外国人生活復興センター、外国人地震情報センター（現多文化共生センター）、さぼーと21などの被災ベトナム人支援ネットなどの努力にもかかわらず、震災後1年を経た今日でも約100名が公園での避難生活を余儀なくされている。

しかし、震災のとき、我々は国籍の別なく助け合う経験をしたといわれる。南駒栄公園のように、ベトナム人と日本人が共に災難を受けた仲間として連帯する動きもある。長田の市民は、こうした経験を生かし、アジアの一員としてアジアの各地の人々とつながって

いることを誇りに思い、共生していく街を作っていきたいと考える。その中核がアジアタウンである。

震災後の長田では、ケミカル産業の復興・展望は困難をきわめ、区人口が95000人と激減して商業も苦しい。そこで、県市の提唱するアジアに焦点をすえた長田での「国際ボランティア文化交流センター整備」や「靴のまちながた構想」を視野に入れ、商工住の活性化に寄与する産業・観光複合的なファッションリゾートの核・下町らしい文化の発信拠点としてアジアタウンを実現し、地元産業・商業の復興に寄与したいと「神戸アジアタウン基本構想」（1996年1月26日）はうたっている。さらに、アジアの一員として生きるこの街に魅力を感じる若者やアジアの留学生が交流し、住み慣れた街に戻りたい高齢者も共生するような街をつくり、地元住民の生活再建の核としたいという。

2. 仲間との出会い

震災直後から新長田南部地区でのアジア焼肉街構想を思いついた私が、後にアジアタウン推進協議会をおこす在日韓国人の南信吉さんと初めて会ったのは、長田区御蔵通5丁目の焼け跡だった。ピースポートを地元に取り継いだボランティア団体「すたあと」での「これからの長田を考える会」であった。区画整理事業が都市計画決定される直前の、騒然とした3月12日であった。

熱心にケミカル産業の震災以後の現状と将来について語り、神戸ファッションシューズ協議会による復興について語る南さんに驚い

た。ケミカルの大手でもない靴の底屋さんの社長だという南さんが、ケミカル産業全体に対して、壮大な将来ビジョンを持っていることに驚愕した。

その頃の私は、御菅のガレキ撤去を竹内千恵子さんら地元の人達とすすめつつ、長田南部の復興を、六間道や真陽の人々、会長だけではなくお好み焼き屋や市場に寄っては話し込んでいた。5月某日、真陽の丸五市場の「順ちゃん」キムチ店によって、アジア焼肉街に関する意向を立ち話で聞いていた。このとき、たまたま店に李孝さんがいた。李孝さんは、以前、外国語学校の職員で、その学校の日本語学科設立で面識があった。「イヤ-ア」ということになり、震災で彼の倉庫が倒壊したことを話ながらも、「焼肉屋の再建意向調

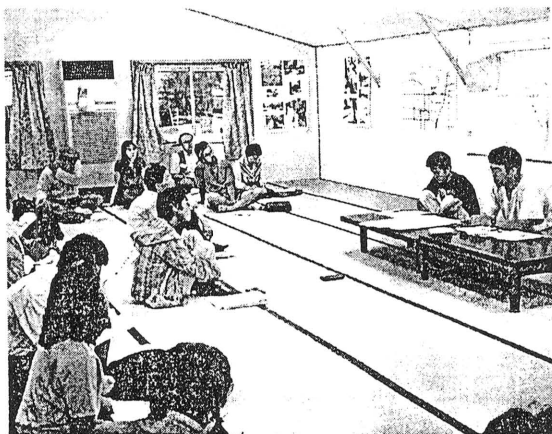
査やったら、エエ人、知っとるから」と、携帯電話を取り出した。紹介されて行った先が、南加工。顔を見るなり、「アレ、どっかで会いました?」「先生、何、言うとな。『すたあと』で会うたやないですが」「アー、長田は狭い」と大笑い。

南さんの紹介で、民団商工会に全隆男さんを訪ねた。震災復興のためのワールドタウンの示唆と、その調査協力の約束をもらう。全さんの指示で、李相泰さんから電話がかかってきた。在日フォーラムでのコリアタウン研究や、県との協議による国際タウン構想について伺った。「その話は前から研究しとって…」。相泰さんの厳しい言葉にピリピリしながら…。

かくして、「すたあと」の代表であった関

再生、アジア街で

住民らが構想 ふくらむ夢



街づくり懇談会は毎週1回、住民参加で開かれている＝神戸市長田区で

確かに長田区には大勢のアジア人が居住している。外国人は神戸市全体で約四万二千人だが、このうち長田区に住んでいるのは、約九千九百人で中央区とほぼ同規模。中央区には中国人が圧倒的に多く、欧米人の数も多いに比べて、長田区の場合は九割にあたる八千八百九十一人が、韓国・朝鮮人だ。次いでベトナム人の四百七十三人、中国人の四百六十九人と続き、合計二十八カ国の人々が集まっている。アジアタウン構想はこうした人口構成を背景に芽生えてきた。

「南京町」

阪神大震災火 長田区 ウォッチング

地区住民参加
週1で懇談会

焼け跡に建てられ、レハブ二階建ての「公会堂」には、午後六時前になると四、五十人の住民たちがぞろぞろと集まってくる。毎週、市民らが参加して開いている「長

阪神大震災で奪われていた大阪・神戸間の「足」は、二十六日の阪神本線・御影～西瀬間の運転再開で百六十日ぶりに全線開通。いよいよ復興に拍車がかかる。神戸市も今月末には復興計画をまとめるが、長田区の住民たちの間から焼け跡を「アジアタウン」とする構想が持ち上がっている。同区は韓国・朝鮮や中国、ベトナムなど二十ハカ国の人が住み、外国人数が神戸全体の四分の一を占める地区。大震災後には住宅や就労など、とりわけ厳しい問題に直面した在日外国人たちだが、被災生活を契機に日本人社会との連帯も活発化した。いま躍進する「アジア」をキーワードに、長田復興は急ピッチで進むのか。

(桐山 桂一)

東京新聞

発行所
中日新聞東京本社
東京都港区港南2丁目3-13

特報 神戸市にアジアタウン構想…813面
核心 参院選比例代表順位で苦悩…3面
TOKYO データ開示拒み毎日15万円…22面

第1図 懇談会でのアジアタウンの討議を「特報」で伝える『東京新聞』（1995年6月27日）

西大学の三谷真さんが司会する長田の良さを生かしたまちづくり懇談会では、6月頃、南さんの新長田駅北の区画整理事業区域における具体的なアジアタウンの計画の一進一退と、私の長田区全体のなかで考えようという声が交錯した。南さんとは長田全部のことを視野に入れていたが、当面は細田4・5丁目まちづくり協議会からの提案であった。一方の私のアジア焼肉街構想は地元貞陽地区の共同再建計画において合意がとれずに頓挫してしまった。懇談会では、ベトナム籍住民の支援をしている日比野純一さんや、定住外国人生活復興センターの金宣吉さんとも、多くの外国籍住民とともに住む豊かさを長田のまちづくりに生かしたいと話した。それは、まさに私の生まれた松野通1丁目の長屋であった。隣のおばさんから、キムチをもらって行き来する、楽しい長屋の風景であった。定時制の長田工業高校の教師時代には、生徒の職場訪問で、市場をまわった。市場には「韓国風の蕨のお好み焼き」が並び、食べ歩いた。宴会の飲み屋では、在日のおばさんと朝鮮の太鼓を叩いて踊った。昼食のお好み焼屋の鉄板の横には、いかなごの釘煮と大根キムチが並び、冷蔵庫からは韓国風ドブクロが出てくる。長田人としての私の原点である。

こんな私が、アジア焼肉街を思いついたのである。その私を、南さんは9月からアジアタウン推進準備会に招いてくれた。会議に出て驚いた。竹内さん、全さん、孝さん、相泰さん、日比野さん、宣吉さん、三谷さん、みんないる。私は、この楽しい仲間とともにアジアタウンを作っていける。この人間関係こそが、この不幸な震災で私が得た最大の幸福。ちなみに、私の生家は南さんの生家の150m西にあり、南さんは夢野台高校の大先輩であった。

「アー、長田は狭い」、そして、楽しい。

正直に言おう。私には震災前、韓国朝鮮籍の友人はほとんどなかった。「日本社会のな

かの少し異質な存在」として、たまたま韓国朝鮮籍を持つ友人は少しはいたが…。私は、生まれながらにして、韓国朝鮮住民に違和感を持たない長屋に生まれながら、長じて彼らとの付き合いはなかった。ニューカマーのベトナム人の存在は、まったく知らなかった。震災以後、アジア焼肉街を思いついたのは、とりもなおさずの長屋生まれの性であろう。しかし、全さん、孝さん、相泰さん、宣吉さんと初対面の時の緊張は、他でもない、長田の住民の一割にもなる人々とほとんど面識がなかったという私の密かな差別意識によるものである。

前近代の差別は、部落差別など制度として目に見えるものであったが、近代の差別は、被差別者を可視しないことによる差別である。これは、他ならぬ私の指摘である（『夜這いと近代買春』明石書店、1995）。そして、この可視しない差別は、多くの長田住民が持っていた、いや今もある。ただ、地震があって、可視せねばならなくなったのだ。

しかし、可視してみると、楽しい仲間が増えた。新長田のお好み焼屋で、在日韓国朝鮮の仲間とキムチで飲んでいると、日本籍などどうでもいい、俺たちは長田人だと思う。だからこそ、ぼくはこの仲間の抱えている、地方参政権のない苦しみや指紋押捺の苦しみを、同じ長田人の問題としてかたときも忘れることはできない。

地方参政権や指紋押捺の問題を、かわいそうな外国人の人権疎外の問題と捉える限り、本当の共生はない。地震で被害が大きく、復旧できないかわいそうな外国人を励ますためにアジアタウンをやるのだとしたら、共生などありえない。

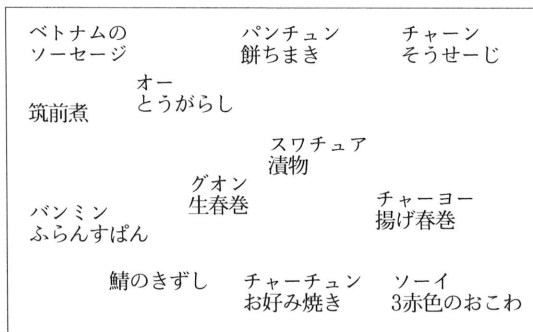
3. ベトナム系長田人の発見と共生の困難さ

アジアタウン推進協議会ができた1996年1月から、日比野さんら被災ベトナム人支援グループと接触するようになった私は、テト

(旧正月)に誘われた。テトでは、南駒栄公園で会う「特別な人々」としてのベトナムではなく、ベトナム籍住民に会うことができた。

2月18日(日曜)、新長田図書館の下の細田総合福祉センターに行った。はじめてベトナム人社会のなかに入るばかりは緊張していた。ところが、行ってみて驚いた。誰が支援ボランティアの日本人なのか、誰がベトナム人なのかかわからないのである。金髪に染めて Yankee 座りをする若者や日本語でイタズラをする小学生がいたり、ちょっと色白で上品な奥さんが餅ちまきを切っている。

彼らが長田の住民であることを、改めて発見した。そこには、普通の住民の生活がある。ただ、日本語が不自由な人が多くて、意思の疎通が困難なことだけであった。パーティーの食卓をのぞいてみると、図のようになっていた。一つ一つベトナム語の料理名を聞いていると、筑前煮・鯖のきずし・お好み焼きが登場する。これはベトナムのテトではなく、ベトナム籍長田住民の長田のテトの料理なのだ。



第2図 1996年2月18日長田テトのテーブルの料理(細田地域福祉センター)

キムチや沖縄・奄美料理はお好み焼とともに、国籍や出身に関わりなく長田人の郷土料理である。ベトナム料理やフィリピン料理も我々の誇る郷土料理としたい。こうしたアジアの香り・情報を、アジアの人と同じ眼の高さで発信する長田のまちづくりの核として、

アジアタウンを提言しようというのである。

私は、地震によって、自分が長田人であることを発見した。その結果歩いてみると、今まで可視できなかった、奄美・沖縄、韓国朝鮮、ベトナムが見えてきた。その結果、己の差別意識に気づいた。その差別意識を克服するため、アジアタウン推進の活動に参加している。

震災以後、長田では外国系住民と、日本人住民との間にかつてない信頼が芽生えたといわれる。役所やマスコミはこれを「共生」とよび、新しいまちづくりの核にしようという。新たな神戸まつりでも「共生」がテーマとなっている。とはいっても、大多数の日本人にとって、震災以後の外国籍住民との共生はなかなか困難な課題である。「結構」と総論賛成でも、実際に隣の外国人と仲良くすることは、言葉や習慣の上でなかなかめんどうなことである。

今年のテトでも、互いを知り合おうと祭太鼓をしてもらったところ、一部には神聖なテトを穢したと誤解するベトナム人も少なくなかったという。アジア自由市場についても、いざ始まろうとすると、「まさか役所が、任意団体の活動にお金をかけるようなことはないやろな」と、足をひっぱる声が出てくる。実際にアジアタウンが自分の地区にできるとなると、各論反対の声は大きくなるだろう。

しかし、ボーダレス時代において、共生は好むと好まざるとに関わらず必要とされる。震災で外国籍住民の姿を我々は発見した。ならば、外国籍住民を可視して、ともに生きる楽しさを追求するしかない。日本籍住民が外国籍住民を可視して、新しいアジアの一員として生きる街を作る核としてアジアタウンの実現をめざしている。

だからこそ、この町で生きる在日韓国朝鮮人の仲間は、コリアタウンでは駄目で、アジアタウンだと考えているのである。

4. アジアの多様性

ところで、日本における「アジア」とはどのような意味を持っていたのか。そして、現状ではどのような意味を持つのか考えてみよう。

そもそも、欧米諸国にとって、アジアとは非欧米的な社会、あこがれの「オリент」にすぎなかった。オリエンタリズムであり、そのあこがれ略奪に変わるのが、18～19世紀の植民地主義であった。

19世紀に入って、あわてて欧米化しようとした日本は、日清戦争の勝利を機に、日本社会が急速に国家にのみこまれていくのと同時に、日本人の大半はアジアを劣った地域の国家群として理解した。国境を越えた、多様な人々・多様な生活があることを見失った。

今日、「アジアの時代に乗り遅れるな」的な「アジアの中核」「アジアの拠点、ハブ機能」という物言いが福岡や大阪などでしきりに語られる。しかし、一昔前、欧米に追いつき追い越し、アジアとは住む世界が違うと「経済大国」を謳歌したのは誰であったか。とうの昔にバブルがはじけてしまった「経済大国」の幻影を後生大事にかかえつつ、アジアのハブとは聞いてあきれ。アジアを、未だに資源豊富で開発が進みつつある発展途上の国家群・市場と理解することは、劣ったアジア国家群の認識と何らかわらない。

アジアは、タイやビルマ・マレーシアという国家単位で語れないこと、多様な民族・多様な文化の総体であることの認識がない。我々はアジアを国家群ごとの市場と見る幻想をやめた方が現実的である。むしろ、アジアの国家の枠に入らない、いや個人レベルでいえば、東南アジアでは歴史的には家族名も明確でなく、家族の枠が不明確な多様な社会であることを、理解すべきである。そして、アジアのその多様性に学ぶことから、我々の近代が作ってきた現在、ステレオタイプの国家・国民観を打ち破り、国民から市民へ、国家経済から

地域生活へと視点を移す必要がある。

そうした議論はさておき、20歳前後の若者の間では、そうした国家群市場としてのステレオタイプのアジア観は崩れている。彼らは、シンガポールの大ホテルでディックリーのショーにお金をはたかかと思えば、バンコクのスラムのあばさんとも気軽に話し合う。思いつきでタイ東北部へ行つては、農家に住み込み、「おしん」の話をしている。東京では、フリーターとして、ベトナム人と一緒に話しあい、日本国籍の人との賃金の差や、外国人登録について話あっている。彼らはタイのなかにも、モン族もカレン族・タイ族もいろいろいる事を知っている。

そして、毎日、台北でリリースしたチャゲアスやマレーシアでリリースしたサザンを聞きながら、アジアの多様性を肌で知っているのだ。神戸アジアタウンは、そうした若者の感覚に訴える街になりたいと思っている。

5. アジアをみすえた観光立都

神戸観光が震災で大変は打撃だという。観光施設が復旧したのに、観光客が戻らず深刻な状況だという。その打開にはどのような、新たな試みが必要なのだろうか。大観光時代だからといって、またもやチャチな観光施設を復旧した所で、本当に観光客が来るのだろうか（石森秀三「大観光時代と神戸観光の復興」『神戸新聞』1995年11月19日）

そもそも観光とは単なる商売ではない。市民が我が町を誇りに思い、その魅力を他地の人々に分け与える行為である。その代償としていくばくかの経済利益を得るにすぎない。この点が明確にならねば、異人館やホテルをいくら修復しても、長期的には観光客は戻らないのではなからうか。

震災以前、市内各地の観光拠点が市の施策として開発された。異人館やワイン城、フルーツ・フラワーパーク、水族館、六甲牧場、ポートアイランド、酒蔵、新神戸ロープウェー…。

しかし、長田には観光施設も宿泊施設もない。観光空白区であった。長田は神戸観光のなかで、市役所にとっては、誇りに思ってもらえなかった場所ではなかったか。

しかし、震災以後、我々は長田の良さを模索しながらまちづくりを考えてきた。その結果、長田は様々な外国籍の住民や、奄美・沖縄、九州・四国の人々を受入れ、心豊かに暮らしていたことがわかった。

また、大正時代からこの町に住み着いた沖縄・奄美の同胞も、我々の誇りだ。長田にはおいしい奄美・沖縄料理の店がある。鹿児島県産品の店もある。台湾料理の店も御菅に復旧した。いまなお避難所暮らしのなか頑張っているベトナムの方の炊事場からは、繊細な味のベトナム料理の香りがする。

この誇りを生かした観光スポットを作る必要がある。これが神戸アジアタウンである。

もう一方で、震災がいつ来るかと恐れ、防災まちづくりをしている東京都民や世界中の人々が、長田の震災経験や復興まちづくりの経験を知りたがっている。そこで、震災記念的な場所やガレキなどの記念物を町の各所に保存、オブジェ化し、まちづくりの様子や震災の厳しさが理解できる博物館を建設する必要がある。菅原市場は、寅さんも引き寄せた聖地である。

震災は悲しい。しかし、震災経験やまちづくりを語れる人や場所があることも、世界の長田にとっては誇りなのだ。

アジアタウンの味の楽しさと、震災の厳しさ・防災まちづくりの学習コースを設定すれば、全国の自治体やまちづくり関係者、修学旅行客を誘致できるだけではなく、躍進するアジアの国々から、多くの来訪者を得ることができる。

高度経済成長以後、神戸経済はファッション産業や観光・コンベンションに多様化してきた。異人館街の繁栄といい、ポートピアの成功といい、国際都市神戸の売り込みは成功

した。しかし、神戸の国際イメージとは、つまるところ、国内向けの欧米イメージではなかったか。長田は、我々の誇りに思うアジアの人々とともに生きるこの町の魅力、味、ともに辛酸をなめた震災経験を、集客に転換する知恵を持つべきではなかろうか。

役所はこうした市民の声を生かして、観光の復興をすすめるべきであろう。

6. 神戸アジアタウンの計画

(1) 西の副都心まちづくり協議会とアジアタウン推進協議会との関係

実は、アジアタウンの構想には二つある。一つは、長田区南部の各自治会やケミカル工業組合・商店街理事長などが集まった、官製の巨大なまちづくり協議会である「西の副都心まちづくり協議会」が商業活性化部会を作って検討している、ワールドアジアタウン構想である。これは、新長田南部地区第二種再開発の網にかからなかった本町通りや六間道商店街・真陽地区・駒ヶ林の活性化をどのように考えていくのかという認識にもとづいて構想されている。商業活性化部会の発想は、西の副都心まちづくり協議会の事務局長で、復旧の仮設共同店舗「パラル」(約120店舗)の経営管理をすすめてきた久二塚まちづくり協議会の事務局長でもある東さん、三谷さんが森栗の素案を協議検討した、たたき台があるにすぎない。

これに対して、神戸アジアタウン推進協議会がすすめているのは、「靴のまちながた構想」にもとづいて、新長田駅北区画整理事業地域において展開している計画であり、在日韓国人のつながりが中心となっており、南信吉さんが会長である。三谷も森栗も東もここには出席している一方で、ワールドアジアタウンの計画の北部地域(ノースアジア部会)として神戸アジアタウンを位置づけている。事実、96年7月からはじめるアジア自由市場の場所は、区画整理事業用の土地を、西の副

都心まちづくり協議会が借りる形になっている。任意団体ではなく、市が震災前から認知していた大きなまちづくり協議会が借りる形になったのである。

二つのアジアタウン構想が並立し、協力しあうことはどのような意味を持っているのだろうか。両方を仕掛けた私の意図は、以下の図にある。

震災前、日本人には、在日韓国朝鮮人に対する反発、差別意識と親近感がないまぜであった。それが、震災以後、人口が10万を切って、アジア籍住民の魅力を打ち出すしか、商業活性化の道はなくなってきている。これが、

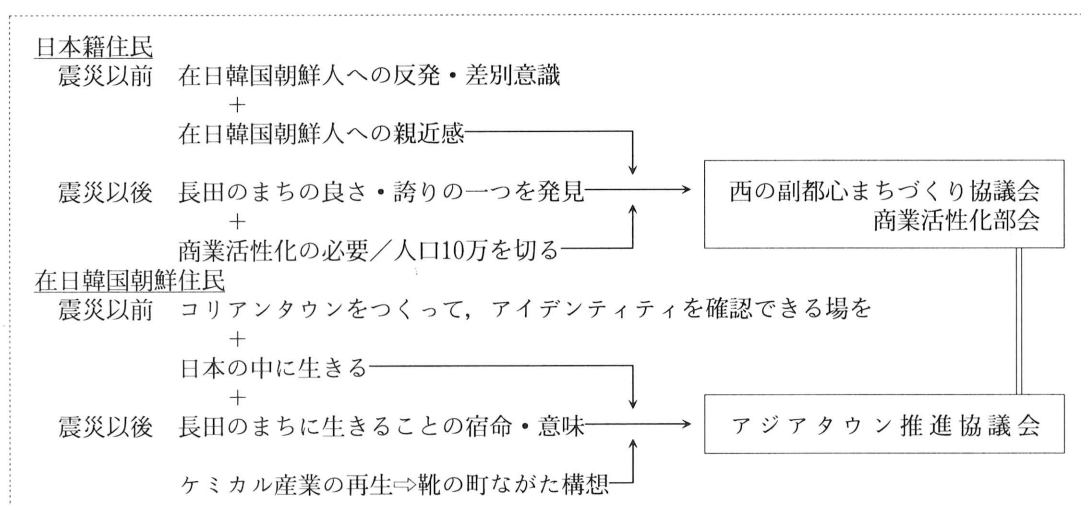
西の副都心まちづくり協議会のワールドアジアタウン構想である。

これに対して、韓国朝鮮籍住民の側は、震災以前は民族タウンの意識が強かったのに、震災以後、ケミカル産業の再生を含めて、この町に生き、ニューカマーとともに生きていく町を自覚した。だから、コリアタウンではなく、アジアタウンなのである。

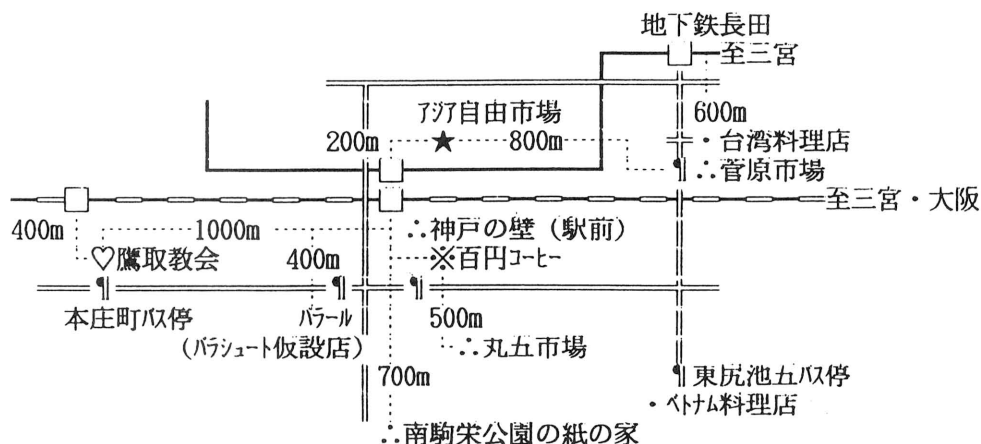
(2) 神戸アジアタウン推進協議会の活動計画

① 神戸アジアタウンまでの短期的活動

アジアタウン建設までの、誘導的活動として、以下をこの2～3年に計画している。



第3図 「副都心の商業活性化」と「ケミカル産業の復興」との関連



第4図 ながたの町並み地図の基本的な街の魅力の位置

- (a) くつのまち…ながた, アジア自由市場 (1996年7月~1998年)
- ・地元出店や外国籍住民の出店など
 - ・アジアの木の植樹
 - ・靴作業の展示即売
 - ・アジア料理とアジア音楽ソフトの提供
 - ・毎月の各民族文化ごとのイベントの実施
- (b) 標識の多言語化
従来の漢字・英語に加えて, ハングル・ベトナム文字を加えたい。
- ・市営地下鉄・バスの標識, 公共施設の表示に上記文字を加える。
 - ・JR・私鉄駅についても, 多言語表示を求める。
 - ・関係各方面と連携して, 通り名称や町表示にも, 多言語表示を求める。
- (c) 長田のアジア的遺産の発掘・調査
長田の朝鮮食材や奄美・沖縄食材・ベトナム料理などの技能・資産を調査し, 事業計画に盛り込み, 宣伝していく。
- (d) アジアタウン運営の事業主体の設立
- ② アジアタウンの実現 (1998年~2001年)
- (e) 靴工房街や靴の資料館・アジアイベント広場・アジア映画館を含めたファッションリゾート施設・アジアタウンを, 住民定住・アジアの留学生施設を含めた形で市に建設提言していく。当推進協議会は, 民間資本と連絡をとり, その運営主体の中核となる用意がある。
- (f) 設立されたアジアタウンをFMわいわいの情報発信と結び付け, 国際ボランティア文化交流センターとも連携をとり, 下町らしい国際交流拠点とする。
- ③ アジアタウンを含めた, 長田南部の都市再開発への連携
西の副都心まちづくり協議会の商業活性化部会の考える「ワールド・アジアタ

ウン構想」とも連携し, 以下の事業を視野に入れて, 協力していきたい。

- (g) アジアをキーワードとした国際ボランティア施設・国際学校・靴のマイスター学校の設立・誘致, 共生をキーワードとした福祉専門学校・福祉のまちづくり・食肉資料館などに関しても, 連携をとって協力していきたい。

- (h) 関西空港との連絡バスなどの直接交通手段や高速湾岸線南駒栄出口と長田 S. A. を視野にいった, 長田南部全体のまちづくりについても, 協力・していきたい。

(3) FMわいわいの使命

同じ外国人向けFMにFMココロがある。大阪南港のアジアトレードセンターにスタジオを置き, 広域周波数を持ち, 行政が支援している放送局である。残念ながら, FMわいわいはそれに比ぶべくもない, ボランティアスタッフにより1MのミニFMにすぎない。しかしFMココロが, 外国人情報に徹しているため, 日本人にはわからないことや, 音楽が少ない傾向があるのに対して, FMわいわいは, 神戸¹⁾に行かねば聞けないアジア言語と音楽のシャワーに徹する必要がある。長田というおもしろい街が情報を発している神戸¹⁾を打ち出し, 長田まち遊び情報を提供する必要がありそうだ。

したがって, 短期的には七月からのアジア自由市場の, イベント情報や, 街角サイクリングの情報スポットの紹介などを展開していく必要があろう。そして, 将来的には, アジアタウンを中心とした長田のコミュニティーFMとして, 第三セクターで運営される再開発ビルの管理運営会社, ながたまちづくり会社と提携して, アジアタウンを中心としたまちづくりの地域情報に徹する必要があると思う。

(4) くつの街…アジア自由市場

以上のような展望にたって, 7月20日から

アジア自由市場をはじめ。とりあえず、年内まで、1月に1回、土曜・日曜に行う予定で、都合12回を考えている。地元や出店者、行政の意見があれば、夏休みなどには増やすことも可能だろう。最初の7月20日は、三宮の東遊園地にでかけて、「神戸まつり」の一部として展開することを、市民局と協議している。11月には、日本ケミカルシューズ工業会の主催する「くつつ子祭」が実施されるが、それをこの自由市場でおこなう構想も出ている。

場所は、新長田駅北區画整理事業区域の事業用仮設用地の一部（細田5丁目2，化学センタービル跡地，約2000m²）を，地元振興のため，地元まちづくり協議会の要請にもとづいて，都市計画局から半年だけ借りておこなう。

2月4日に，推進協議会のメンバーと新聞公募したボランティアスタッフを含めて50名ほどで実行委員会を結成して，以下のような企画を検討している。企画の決定は4月20日であり，その時点で出店希望者を公募する。

- (a) 各国ナショナルデーでの映画会・料理教室など。
- (b) 各国の植物の植樹祭を開催前にする。
- (c) 放置自転車の利用による，長田の町並み見学サイクリングを実施する。

- (d) インターネットによる発信
- (e) 広報誌による，長田の町並み調査と地図化，特色のある店の日曜開店の要請，紹介承諾など。FMわいわいによる報道など。
- (f) 将来のアジアタウンの建物の側壁レンガとして，個人名入りレンガによる寄付を公募する。

7. 霧 中

実は，私はアジア自由市場の実行委員長という重責を担うことになった。しかし，どうなるかまったく予測できない。多くの人々が実行委員会に集まるなかで，何とかなるかと思わねば，体がもたない。

しかし，震災復興や戦災復興で，最も重要なことは，街の将来のビジョンや夢を描くことではない。そのためにみな努力すればよいのである。残念ながら，震災以後の長田の街では行政のビジョンは示されなかった。再開発や区画整理の手法が先に来て，ビジョンが示されないため，市民がこれを提示しようとしているのである。神戸アジアタウンは，市民による市民のビジョン提示であり，一つの実験ではなかろうか。

（もりくり しげかず・大阪外国語大学）